

## 61 たにおく 谷奥1号墳

一県内に2例しかない銅鏡を副葬する終末期古墳

### 所在地

鳥取市気高町勝見字福田（通称・谷奥）

### 立地

河内平野を北流する永江川、浜村川に挟まれた丘陵の北端近くの東斜面裾に位置する。

### 時期

古墳時代終末期、7世紀前半

### 発見と調査

古墳の存在は江戸時代には知られており、藩主の湯治場の石垣や庭石として石材が抜き取られたらしい。その後、1911年（明治44）に土地所有者が石垣や庭石に利用するために石室を破壊したところ、左側壁の内側に築かれた1m四方の小石室内から多数の遺物が出土したという（文献9）。遺物の一部は東京国立博物館に收藏されたが、一部は土地所有者の手元に残り、鳥取県立博物館に收藏されたものもある。

### 遺跡の種類

古墳（横穴式石室）。墳形は不明。

### 遺構と遺物

石室の形態は、「逢坂型」や「西中園型」などと呼ばれるもので、板状の石材を立てて奥壁や側壁として用い、その外側に石材を継ぎ足して前室、羨道部を構築する。玄室の内側に板石を立てて袖石とし、前室にも同様な構造を設けるのが通例である。同様な平面形の横穴式石室は、伯耆東部地域に分布し、関連が窺われる。

横穴式石室の規模や構造については、土地所有者からの聞き取りによると、全長11mに及ぶ大規模な石室である。玄室は長さ3.8mの右側壁と、幅2.1mの奥壁が残存するが、それ以外は残っていない（図1）。

遺物が出土したのは、前室の左袖石付近と言えるが、1m四方の方形の区画が設けられていたと言う（図1のA）。詳細は明らかでないが、須恵器だけでなく、銅鏡、馬具、刀剣類などもこの区画から出土したようである。同様な区画構造は、他の類例には認められないため、江戸時代の石室破壊の際に出土したものを、再埋置するために作られた建造物の可能性も考えられる。

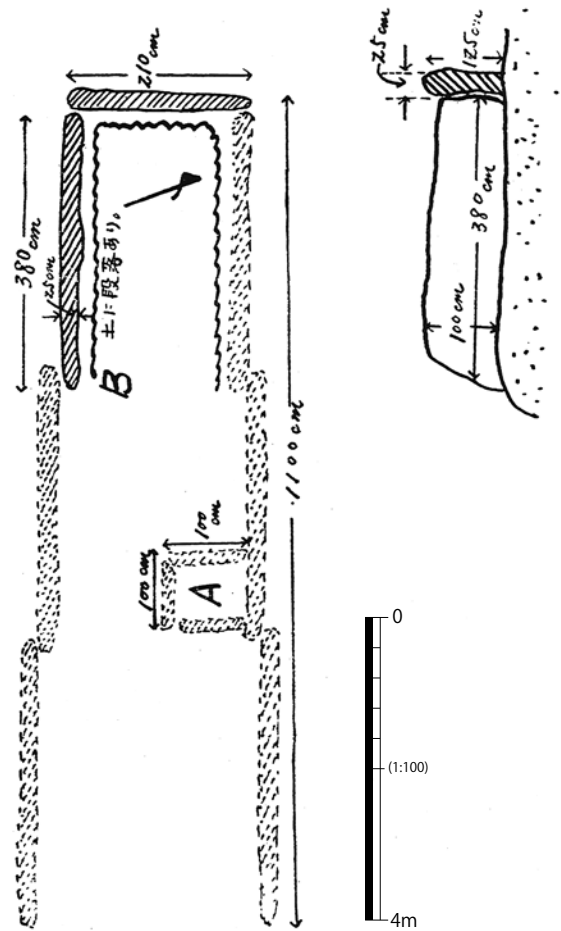


図1 谷奥1号墳横穴式石室復元図

出土遺物は散逸して、現存しないものもある。文献によって記載する情報に異同があるが、総合すると、鏡1面、銅鏡<sup>わん</sup>1個、馬鐸2個、耳環4個、刀装具一式、両頭金具と考えられるもの1点、ガラス小玉1点が存在したようだ。須恵器は、長頸壺、坏、盤、高台付碗の他に横瓶や提瓶もあるらしい（文献1～3、5、文献8、9）。

鏡は、面径12.5cmの巡回式獣像鏡系の仿製鏡である（図2-1）。文献9によると、東京国立博物館に收藏されたらしいが、収藏品目録には記載されておらず、現物は行方不明である。旧鳥取県史（文献2）に掲載された写真から判断すると、1神7獣像を表現し、外区は鋸歯文・複波文の組み合わせとなるようだ。森下章司による巡回式獣像鏡2式で、古墳時代中期末までの期間に位置付けられる（文献6）。他の副葬品とは100年以上時間差があることになる。

刀装具には、鐔などの各パーツがある（図2-2～11）。ただし、本体の刀身や当然想定できる柄頭などはなく、鐔だけで大小6種類になる。すべてが1号墳に伴うものか定かでない、様々な来歴のものが混在してい

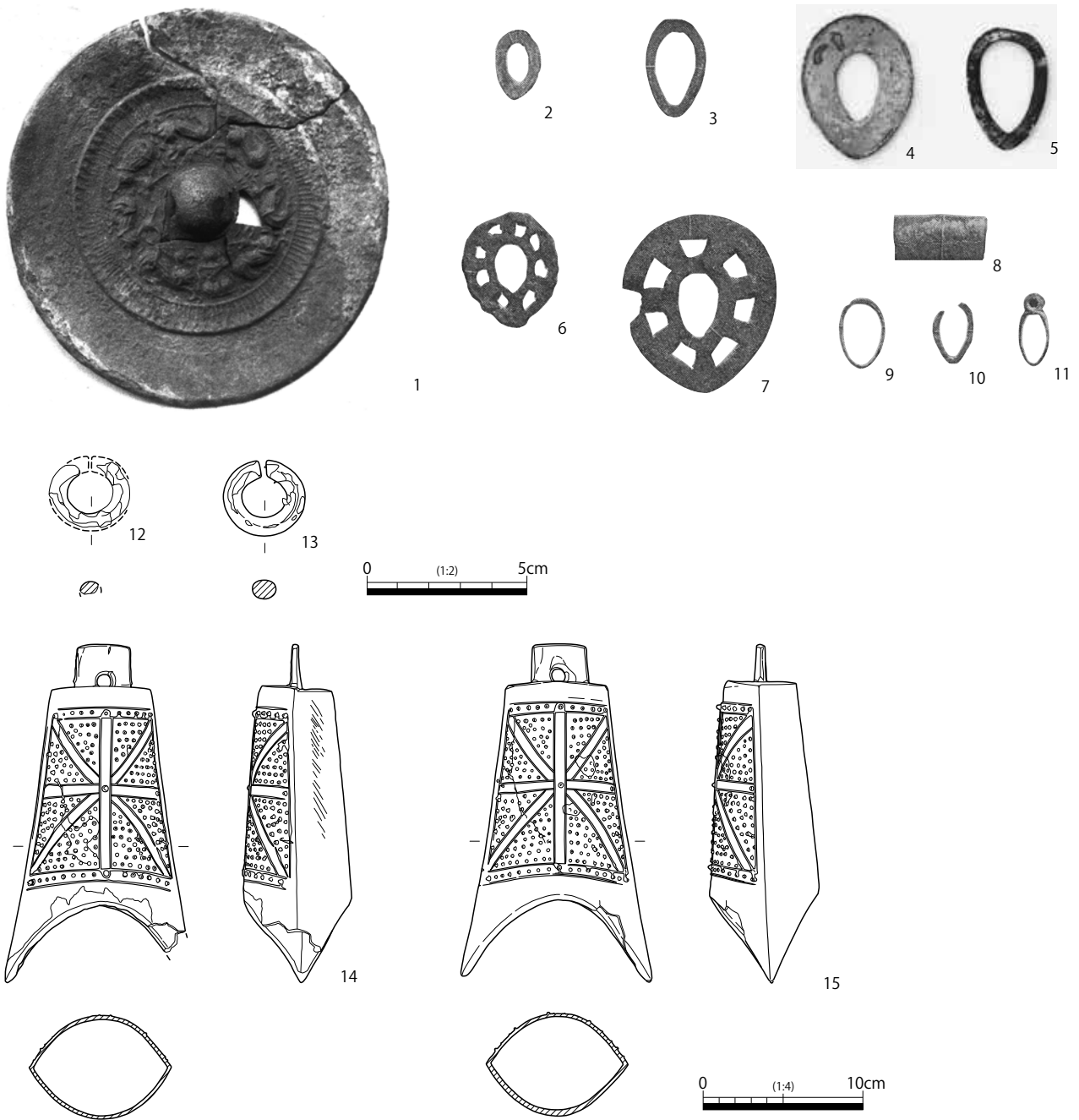


図2 谷奥1号墳出土遺物(1)

る可能性もある。2・3・5は喰出鐔、4は金銅装の無窓鐔、6・7は鉄製の有窓鐔で、6には渦文の銀象嵌がある。8は鞆尻金具、9・10は責金具、11は吊手孔付足金具である。4・5は鳥取県立博物館所蔵品で「伝谷奥1号墳出土」、6・7は安富寛兵衛氏旧蔵品（現鳥取県立博物館、文献4）である。4～7以外のものの所在は不明である。

図2-12・13は東京国立博物館所蔵の耳環で、銅地に金箔張りと考えられる。外径2.4cm～2.7cm、環体部は厚さ0.6cmほどである。1点は出土後にヤスリがけされて一部欠損する。

図2-14・15は、馬鐔である。全長21.1cm、最大幅

12.0cmを測る。器厚は約0.2cmである。表面に2条の並行する突線からなる区画帯によって「田」字形の4区画に分け、さらに各区を斜め方向の区画帯で分割して英国国旗状を呈する文様を描く。台形の四周にあたる区画帯内と、区画帯で分割された三角形の空間内部を珠文で埋める。区画帯の交点にあたる中央のみ、大きめの珠文を入れている。

銅鐔は高台付鐔で、笠形の蓋が伴うB類である（図3-16、文献7）。身の口径は9.2cm、器高7.2cmを測る。高台は高さ2.3cmある。蓋の口径は8.9cmで、高さは宝珠つまみの先端までで4.7cmを測る。身には、口縁

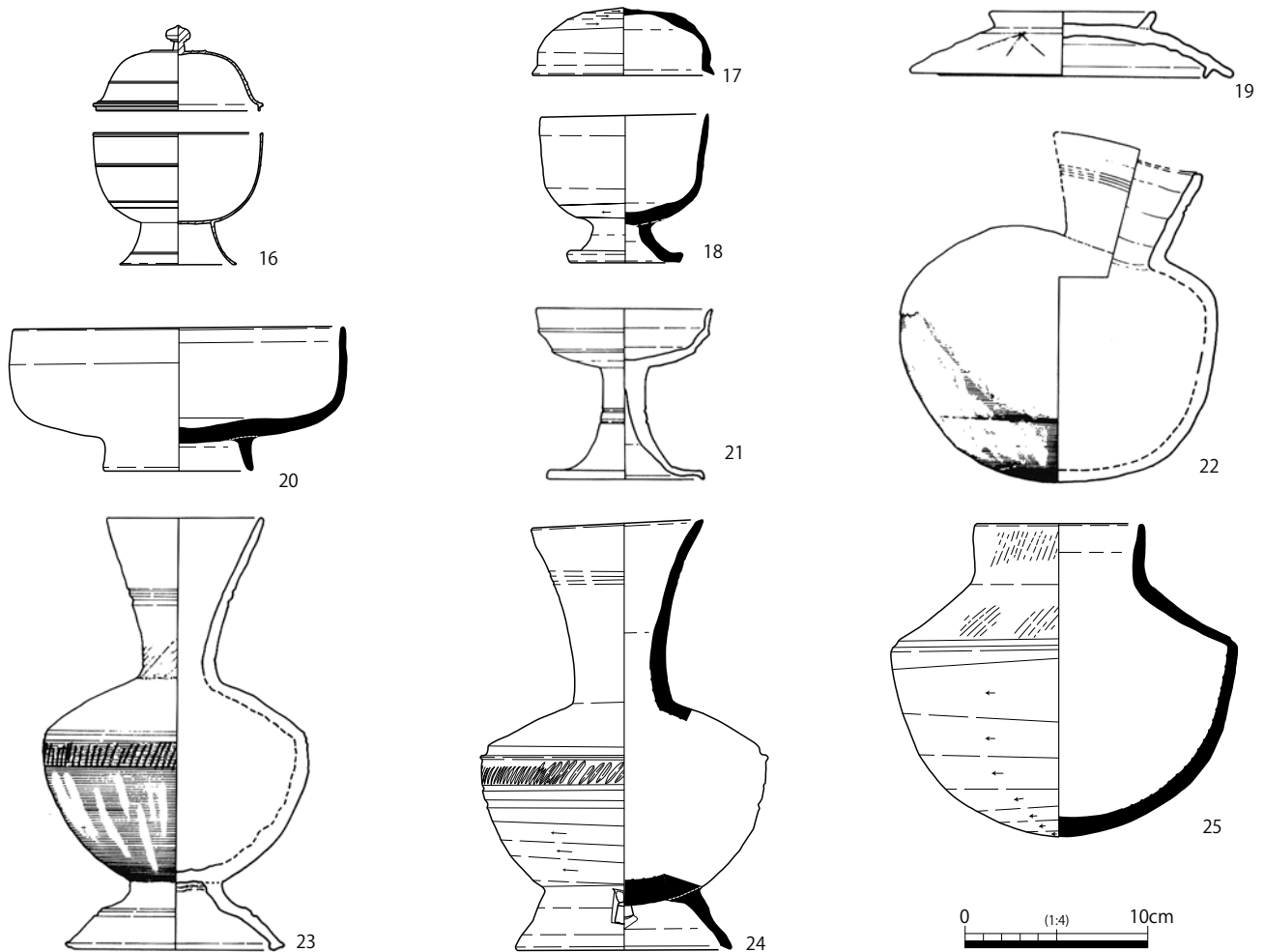


図3 谷奥1号墳出土遺物(2)

部、胴部中ほど、底部付近、高台にそれぞれ3条、2条、2条、2条の断面かまぼこ状の凸線が施される。蓋側には、口縁部の突出部外面に3条、その上部と中ほどに2条の凸線が施されている。また、蓋の天井部には、つまみの周囲に2条の圏線が削り出されている。類例では、このタイプの高台付銅甕には承盤が伴う例があるが、本例には知られていない。

東京国立博物館に収蔵された須恵器は、坏、蓋、脚付碗、長頸壺、短頸壺がある。

坏とされるものは、小型の短頸壺などの蓋と考えられる(図3-17)。口径9.8cm、高さ3.7cmを測り、天井部を反時計回りにヘラケズリする。口縁端部は内傾する面を持つ。

蓋とされるものは、高台状の脚と考えられる部分の端部が摩滅しており、内面底部にも摩滅痕が見られるため、脚がつく深い鉢状の器と考えられる(図3-20)。口径18.0cm、高さ7.9cmを測る。大きさや形状からすると、

承盤の代用であった可能性も考えられる。

脚付碗は口径9.1cm、高さ8.2cm、脚高は2.2cmである(図3-18)。

長頸壺は直線的に広がる脚が付き、脚部に方形の透かしを2方向に入れる。口径9.3cm、器高23.5cm、肩部が張る形態で胴部最大径は15.7cmである。外面に板状工具による刺突文が施される。底部外面は回転ヘラケズリを施す(図3-24)。

短頸壺は大型品で、口径9.0cm、器高17.1cmを測る。丸底で、長頸壺同様に肩部が張る形態で最大径は19.0cmを測る。後円部から肩部にかけて平行タタキ目が残る。底部外面は回転ヘラケズリを施す(図3-25)。

土地所有者の手元に残ったという須恵器には輪状つまみがつく坏蓋、無蓋高坏、平瓶、脚付長頸壺がある。

坏蓋は、口径17.8cm、高さ3.4cmを測る。内側にかえりが付き、外面にヘラ記号がある。

高坏は口径9.8cm、高さ9.4cmを測る。脚部の中ほど

に2条の凹線が巡るが、透かしはない。

平瓶は、口径8.6cm、器高19.4cm、胴部最大径17.6cmを測るものである。

脚付長頸壺は、東京国立博物館の収蔵品とは異なって、屈曲して広がる脚をもつもので透かしはない。口径8.6cm、器高23.8cm、肩部が張る形態で胴部最大径は14.8cmである。外面に板状工具による刺突文が施される点は同様だが、底部外面はかき目が施されている。

これらの須恵器の年代は、概ね7世紀後半に位置付けられる。銅鏡はやや古く、7世紀前半に位置付けられており、刀装具もほぼ同様と考えられる。一方、馬鐸は6世紀後半に類例が多いものと考えられ、7世紀台に降るものではない。鏡はすでに見たように5世紀末に位置付けられる。遺物の時期幅はかなり広く、出土の経緯からしても、信頼に足るセット関係を読み取ることは難しい。1号墳とともに2号墳も同じ頃に破壊を受けていることから、出土遺物が混在している可能性も考えられる。

#### 特徴と意義

出土遺物の個々の型式学的な位置や製作技法は、貴重な検討材料になりうるが、谷奥1号墳の出土品として確実なものかどうかは、疑念が残るものも多い。資料の取り扱いには慎重を要する。

#### 現状と遺物

銅鏡、馬鐸、須恵器（蓋、坏、脚付碗、長頸壺、短頸壺）は東京国立博物館の収蔵品である。この他に刀装具で現存するものは、鳥取県立博物館に収蔵されるものの、伝承資料であり、確実な出土品とは断定できない。

#### 文献

1. 気高町教育委員会（編）1977『気高町誌』
2. 鳥取県（編）1972『鳥取県史』第1巻 原始古代
3. 鳥取県埋蔵文化財センター（編）1986『鳥取県の古墳』
4. 鳥取県立博物館 1994『安富コレクション目録』
5. 東方仁史（編）2008『企画展図録 因幡・伯耆の王者たち』鳥取県立博物館
6. 森下章司 1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号、pp. 1-43
7. 毛利光俊彦 1991「青銅製容器・ガラス容器」『古墳時代の研究』8古墳Ⅱ副葬品、雄山閣、pp. 189-205
8. 米田文孝（編）1982『寺内京南遺跡発掘調査報告—ほ場整備に伴う調査—』鹿野町教育委員会
9. 山根幸恵 1957「谷奥第一号古墳発掘状況について—鳥取県気高郡気高町福田の銅鏡出土古墳の発掘状況について—」『考古学雑誌』第42巻第3号、pp. 54-57

（高田 健一）